

北見赤十字病院(認知症疾患医療センター)市民公開講座

開催報告



【テーマ】 「認知症になってもワシはワシ！」

【日時】 令和元年11月10日(日) 10:30~12:00

【会場】 北見市芸術文化ホール 中ホール

令和元年11月10日(日)市民公開講座を開催致しました。

当日は250名の市民・関係者の皆様にご来場いただき盛大に終えることができました。ご協力ありがとうございました。以下、内容を報告致します。



【北見市のとりくみ】

北見市保健福祉部 介護福祉課主幹 長尾智美氏 北見市における認知症に関する取り組みの紹介。

【トークライブ】

座長:福島恵美子氏(北見赤十字病院 精神保健対策推進室副室長 兼 看護師長 認知症看護認定看護師)

講師:竹内 裕氏(一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループメンバー)
(特定非営利法人もちもちの木「たぬき倶楽部」代表)

聞き手:木田裕子氏(若年性認知症の本人・家族の地域生活支援を考える会代表)

最初に、木田氏より、若年性認知症を取り巻く現状について説明があった。若年性認知症は40~50代に発症し、診断を受けることが多い。若年認知症の苦悩として、具体的には経済的困窮から家族生活が激変、偏見を恐れ家族間だけの苦悩、適切な居場所・福祉・介護に繋がらない等が挙げられる。このような人生半ばであるゆえの苦悩と不安により、当事者が「自分として生きる」目処を失ってしまう状況があるとお話頂いた。

竹内裕氏は、広島県在住。営業一筋で役員として働いてきたが、57才頃から職場や取引先でトラブルが続き、勤務先の社長に受診を勧められた。59歳で前頭葉側頭葉型認知症との診断を受ける。仕事一筋で生きてきた自分が、認知症との診断に「もう俺の人生は終わりだ。」と絶望した。診断後、自宅に引きこもっていた時期もある。その時期が一番辛かった。同窓会で昔からの友人達に認知症の自分を受け入れられた経験等を経て外に出掛けられるようになった。さらに同じく若年性認知症当事者の仲間と出会い、講演会やボランティア活動など多忙な日々を過ごしている。自分は、落ち着ける居場所、自分を支えてくれた人や言葉、経済的課題の解決を経て、絶望から脱却できた。現在は、多世代シェアハウスにて生活している。

竹内氏は会場の参加者へのメッセージとして、「自分は認知症だが、笑って暮らすも一生、泣いて暮らすも一生と考え、今日を楽しく、明日も楽しく、明後日以降の事はくよくよ考えないようにしている。」

また、「自分らしく過ごすためには近くに素敵なサポーターを見つけること。自分にとっての木田さんのように、頼りにできる、手を差し伸べてくれる人が必ず皆さんの近くにもいる。そのためには認知症をカミングアウトすること。自分は認知症だと堂々と言っていいと思う。」

さらに、「オレンジリング（認知症サポーター養成講座受講者）を持っている方は常に身につけていて欲しい。当事者が困った時、オレンジリングを持っている方を見ると心強い。実際に話しかけ易いので。」と、竹内氏の当事者ならではのお話に会場の参加者は聞き入っていました。

何と言っても今回は、講師お二人の広島弁でのユーモアのある掛け合いに、明るい雰囲気トークライブとなりました。

～参加者のアンケートより抜粋～

- ・認知症の当事者からの話を直接聞くことがないので、大変勉強になりました。
- ・認知症の事を明るく楽しく話されていて、認知症をオープンにするのはとても良いことと思った。
- ・「間違えること忘れることを前提としている」とても参考になりました。
- ・対談方式の講演はとても分かり易くて良かった。
- ・当事者の方の家族の話も伺ってみたいと思いました。予防→備えの捉えが印象的でした。



今後も市民の皆様の声を活動に反映しつつ、講演会・研修会等で情報発信していきたいと思えます。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

(北見赤十字病院認知症疾患医療センター事務局)